第4回沼津御用邸記念公園・西附属邸等の展示のあり方に関する懇話会 議事録

日 時：平成29年1月26日（木）15:00～17:00

会 場：沼津市民文化センター 第1会議室

出席者：（委 員）浅羽英男氏、金子淳氏、金子綾氏

（事務局等）間宮都市計画部長、松下緑地公園課長、杉山緑地公園課長
補佐、江藤係長、井出主任
株式会社乃村工藝社 志水、稲垣、沢田

1 開会**2 間宮都市計画部長挨拶****3 西附属邸等における展示等の改修計画案の検討****（事務局説明）**

事務局：事務局よりご説明いたします。資料に沿って説明させていただきます。今回は西附属邸展示等の改修計画案につきまして、その概要を説明させていただきます。

まずは資料の1ページをご覧ください。最初に、これまでの検討経過について簡単に振り返りをしてまいります。

第1回の懇話会では、沼津御用邸の展示などにおける現状と課題の洗い出しを行いました。この中で主な意見といたしましては、「建築的視点で伝えるべき情報は多いが、十分な整備がなされていない」「建物外観も建築的な特徴を持ってはいるが、ルート整備がなされていない」。また「西附属邸入館までの案内が分かりにくい」「公園全体の案内も不十分」「原文脈が失われている」といったご意見がありました。

また、浅羽座長のほうから懇話会における共通認識といたしまして、西附属邸の歴史的な建築経緯、西附属邸の歴史的価値などについてお話をいただきました。

次に、第2回の懇話会では、第1回での課題を取りまとめ、その対応方針について検討を行いました。そこでの主な意見としましては、「全体計画の前提として、時代設定を決める必要がある」「皇族の暮らしについて事実以外の演出は不適切」「分かりやすい解説と品位の維持を両立させる必要がある」「来園者ターゲットを定め、それに対し適切な方策を取る必要がある」といったご意見がありました。

次に、第3回ですけれども、第2回に検討いたしました対応方針を取りまとめ、その対応方針についてさらに具体案の検討を行いました。その中で、「全体インフォメーションについては御用邸でどういったものが見学できるのか。来園者が満足できるような内容にすべきである」といったご意見や、西附属邸の見学ルートにつきましては、展示コーナーやガイドダンスコーナーの配置など総合的に考えた場合、「反時計回りが最も妥当なのではないか」というご意見、それから解説計画ですが、「ターゲット層に合わせて階層を設けることが重要である」といったご意見がありました。

このような経過を踏まえまして、今回の第4回目を迎えております。

次に、資料の2ページ目をご覧ください。こちらはアンケート調査の結果となります。昨年7月18日から11月30日までの約4カ月半の間に、展示改修計画の検討と併せまして御用邸に来園した方にアンケート調査を実施いたしましたので、ここで簡単に紹介させていただきます。

アンケート実施の目的といたしましては、現状の来園者動向をアンケートによって把握・分析し、今後どのような対応・取り組みをしていけば来園者の増加につながられるのかということを検討するために実施したものであります。

調査項目といたしましては、資料に記載されておりますとおり14個の設問を用意いたしました。調査結果ですが、アンケートの集計数は120件ありまして、回答者の内訳ですけれども、図1のA、B、Cから分かりますが50代以上の方が半数以上を占めております。また男女比ですが、52%と女性がやや多いものの、ほぼ同程度という結果になりました。

次に、資料の右側に移りまして、こちらにはアンケートの調査結果から推測される西附属邸の現状の来園者像と、そこから考えられる対応方策を挙げております。

まず図2から、9割の方が初めての来園という結果となりました。このため、最初の見学で西附属邸などの価値が伝わる分かりやすい解説計画を行っていくことがより重要となります。また初めての来園者をさらに増やしていくために、周辺観光地との連携も必要となってきます。

次に図3から、2回以上訪れたことのある方は、初めて訪問する方と比べ日帰りが多い傾向があることが分かりました。この結果から、特に日帰り圏内の人々に向けた企画展示とか多様なプログラムの周知など、こういったものを徹底させることが重要であると考えます。

次に図の4のA、Bから、9割ですけれども来園者の多くは、自宅や宿泊施設から直接御用邸を訪れているということ、それから来園者の7割が御用邸を見学した後は自宅・宿泊先に帰り、3割の方は引き続き観光施設を訪問していることも分かりました。

さらに図5からですが、本施設を知ったきっかけについては、紹介が3割、ホームページ・SNSとテレビがほぼ同数の1.5割という結果となっております。こういったことから、口コミやホームページ・SNSを意識した広報の重要性というものが考えられます。

次に、資料の3ページをご覧ください。ここでは西附属邸およびその周辺を含めた西附属邸全体の改修方針、それから展示改修の基本的な考え方についてご説明をいたします。

まず、西附属邸全体の改修方針につきまして、一つ目に「西附属邸の魅力を引き出し伝えるために、西附属邸の価値を明確化する」、二つ目に「品格と分かりやすさを備えた形で、西附属邸の原文脈を伝える」、三つ目として「来園者の満足度を高め、集客力を向上させる」という方針を設定いたしました。

西附属邸の価値につきましては、建築的な価値として別荘建築と宮廷建築の建築様式の違いであったり、皇室を間近に感じる価値として

は謁見所や御座所など普段見ることのできない皇族の暮らしを感じる
ことができたり、また沼津の風土を実感できる価値として、屋敷を囲
む松林や海水浴場、温暖な気候など、皇室の方々の療養のための豊か
な気候風土と沼津の人々と皇室の関わりを実感することのできる場
であるということがあります。

次に、時代設定の考え方についてです。これまでどの時代を基準に
した展示内容を来園者に伝えていくのかということにつきましては詳
細な議論というものはありませんでしたが、展示を検討する上で非常
に重要なことですので、事務局のほうから一つの考え方を提示したい
と思います。

時代設定につきましてはさまざまな考え方がありますけれども、西
附属邸の建物自体が展示物であるという考え方も含めまして、現在の
西附属邸建物として全ての増改築が完了しました大正11年を基準とし、
これに基づきまして、建物のしつらえ、展示計画、解説計画、全ての
整備を行っていききたいと考えます。

各部屋の名前につきましては、増築完了後に作成されました行啓資
料に掲載の部屋名を基準として整理をしていききたいと考えております。

次に、来訪者・来園者ターゲットの考え方ですけれども、これまでの
懇話会でのご意見やアンケート調査の結果などから、この資料に記載
された次の方々を対象とした整備を行っていききたいと考えます。

一つ目に、「御用邸に興味があり十分な見学時間取れる方」、二つ目
に「次世代を担う子どもたち」、三つ目に「沼津市内の中老年のグルー
プ」、四つ目に「見学時間が限定された団体客」、五つ目に「建築に興
味・関心のある方、夕日などの撮影をしたい方など目的が限定的な来
園者」、このような方をターゲットとして考えていききたいと思いま
す。

以上の西附属邸全体の改修方針を踏まえまして、展示改修の際には
四つの基本的な考え方に基づいて進めてまいります。この基本的な考
え方は前回の懇話会でも触れておりますので、簡単にお伝えいたしま
す。

一つ目として、「建築の魅力を伝えていく」、二つ目として「場の性
格を伝えていく」、三つ目として「人々の息遣いを伝えていく」、四つ
目として「子どもたちに価値を伝えていく」ということになります。

次に、資料の4ページをご覧ください。西附属邸全体の展示シナリ
オということになります。前回も触れておりますので、改めてご確認
ということで見ただけであればと思います。

初めに、来園者には公園全体のインフォメーションの案内がありま
す。その後、西附属邸の観覧に際しましては、新たに設ける靴置き場
を利用いたしまして中に入ってくださいます。それから映像ガイダン
スによる説明、常設展示コーナーの見学、各部屋の観覧という流れと
なります。建物内の見学が終わりましたら外に出まして、西附属邸の
建物外観の見学のほうに入っていきます。

次に、資料の5ページをご覧ください。こちらは常設展示における
展示シナリオということになります。先ほどの資料の3ページにあり
ました四つの基本的な考え方に基づきまして、沼津御用邸とは、西附
属邸の建築的特徴など、こういった各項目の展示をこちらで行ってま

います。なお各項目については下にテーマ例を示しておりますが、説明については割愛させていただきます。

次に、資料の 6 ページをご覧ください。前回の懇話会でご議論いただきました見学ルートを示しております。その懇話会の中で、ちょうど右側にあります反時計回りの動線 B 案が、左側の A 案に比べまして評価が高い結果となりました。

これは、B 案が展示改修に必要であると考えます靴置き場や映像ガイダンスコーナー、それから展示コーナーの設置を考慮したときに、広さや動線上において無理なく配置でき、また建物の見どころであります御座所や謁見所など、皇室ゆかりのお部屋から見学していただくことができる点におきましてふさわしいルートであると考えております。改めてですけれども、事務局では、この B 案を第 1 候補として考えていきたいと思っております。

次に、資料の 7 ページをご覧ください。検討いただきました 3 種類の見学ルートにつきまして比較検証をしたものとなります。見学ルートごとにメリット、デメリットがありますけれども、改めて動線面、建築見どころ面、展示面など総合的に考えますと、やはり B 案が最もふさわしい見学ルートではないかという結果となります。ただ B 案にも課題、デメリットの部分がありますので、今後は改善に向けた検討、それから現場での検証といったものを行う必要があります。

また、団体客向けのショート動線についてですけれども、基本的には全体のお部屋を見学していただくことを想定しておりますので、時間に制約のある団体客に限りショート動線を適用することを考えているところですが、前回、御座所、謁見所間の通路が狭くて行き来しづらいというご指摘もありましたので、そちらは運営上の観点から引き続き検討をしてみたいと思います。

次に、資料の 8 ページをご覧ください。こちらは解説計画の基本的な考え方となります。西附属邸展示におきまして解説計画を次の三つに区分いたします。一つ目は、「映像ガイダンスによる情報提供」、二つ目に「見学動線での情報提供」、それから三つ目として「常設展示室における情報提供」となります。なお資料の左下には、見学動線上のサイン展開案として設置イメージ図を示しております。右側ですけれども、サイン等による各情報の提供手法について示しております。これらの設置につきましては、今後の整備段階時に実施計画を踏まえ決めていきたいと考えております。

次に、資料の 9 ページをご覧ください。こちらは、西附属邸の入り口玄関付近から展示コーナーまでの展示制作物の配置について詳細を示したものとなります。先ほどの B 案をベースとして図面を作成しております。

玄関から見ていきますと、左側応接室をアテンダントルーム、右側の詰所、現在職員のいる所ですけれども、こちらを靴箱／ロッカーとして活用していきます。それから女孀室を映像ガイダンスコーナーとして使用し、次に女官室および内舎人を常設展示コーナーとして活用していきます。なお資料中央に常設展示の展開イメージがありますけれども、資料 5 ページで示しております常設展示の展示シナリオに基

づきまして展示を展開してまいります。

それから、指定管理者において実施しております企画展示ですが、企画展示を行う場所につきましては、この懇話会の中ではちょっと出ていなかった部屋ですが、資料のちょうど右上のところ、この紫の色ですけれども、こちらの女官長室の利用を考えていきたいと思えます。現在この女官長室は使われておりません。

この女官長室を使用することによる動線につきましては、資料にも赤い矢印で示しておりますが、見学者には常設展示コーナーから一度縁側に出てくださいまして、女官長室、企画展示コーナーに再び入っていただくという動線を考えております。そして展示コーナーが終わりますと、次は皇室ゆかりの部屋に進み、そのまま反時計回りに見学していただく流れになります。

次に、資料の10ページをご覧ください。ここからは展示を展開していくに当たっての具体的な案を紹介していきます。

まず①ですけれども、皇室の方々の御用邸での暮らしが分かる西附属邸の建築模型を設置してまいります。これにより建築の魅力を引き出すための工夫として、西附属邸建築の成り立ちや全体像を建築模型を用いて分かりやすく伝えていきます。

模型の制作に当たりましては、建築された時代性・様式・構造、川村邸移築部と増築部の区分、それから使用された建材や素材、木組みなどの技法と職人、内装品、じゅうたん、畳、調度品、こういった情報について映像端末とも結び付けながら、見学者に視覚的に示しまして理解していただけるような模型として考えていきたいと思えます。

右側にいきまして、②体験展示—子ども展示ですけれども、こちらは先ほどの視覚的なものだけではなくて、実際に手に取って触ることのできる、これまで西附属邸にはない新たな体験型の展示を取り入れていきます。

具体的には、資料にもありますけれども、西附属邸建築の木組みを知るため木組みパズルを用意いたしまして、それが実際にどの場所で使用されているのかということについても解説をしていきます。そのほか西附属邸の内装に見られるさまざまな模様やパターン、動物をあしらった金具などが実際にどこに設置されているかクイズ形式のものを行ったり、さらに西附属邸の別荘建築と宮廷建築の両方の特徴を西附属邸は有しておりますので、例えば屋根の違いなどについて、なぜ同じ建物でありながらこうなっているのかということも推理してもらおうなど、建築様式を使ったさまざまな取り組みというものを考えていきたいと思えます。

次に、資料の11ページをご覧ください。引き続き展示の具体的な案について紹介していきます。③映像による情報提供ということで、玄関部分に設置を検討しております映像ガイダンスルームについての紹介となります。

映像の内容ですけれども、建築の概要や見どころのほか、植栽等も含めた四季の御用邸、それから周辺の情報なども入れ込みまして観光的側面からの映像も流していきたいと考えます。例えば四季折々の沼津御用邸、沼津御用邸の成立経緯と西附属邸建築の紹介、こういった

内容のものを広報に流すということを考えております。なお西附属邸の邸内ですけれども、段差があったり、あるいは通路幅も十分ではありませんので、見学の難しい車いす利用者への情報提供も、こういった映像を流すことで活用していきたいと考えております。

資料の右側に移りまして、④情景再現となります。これは資料に、下のほうに幾つか写真がありますけれども、その場の意味やイメージを膨らませるために、その状況について立体的に再現していく展示手法となります。視覚的にも分かりやすいため、その時の部屋の特徴やエピソードなどが印象に残りやすくなるということがあります。

ただ、注意しておかなければならないのは西附属邸が宮廷建築であるということで、皇族の方々がまた使用されていたということから、こういったことの実施に際しては、品格を損ねない情景の表現手法につきましては十分な配慮・検討が必要となります。

次に、資料の12ページをご覧ください。こちらでは西附属邸外での全体インフォメーションの考え方と西附属邸の外観見学ルートを設置検討についてまとめております。

まず、全体インフォメーションについては、正門付近、この青丸で囲ったA、B、Cを候補といたしまして、案内看板を設置することで対応したいと考えております。看板の内容構成ですけれども、従来からの公園全体の案内、施設配置図とか料金体系、開館日とかいった情報は当然として、西附属邸の邸内や外観等の写真、皇室の関係性など、こういったものを用意することによって、案内看板を見るだけで公園に対する期待感が高まるような魅力的な内容としていきたいと考えております。

また、個人客と団体客の対応方法ですが、個人客は全体インフォメーションと案内看板の誘導により受付窓口に来ていただきます。それから全体インフォメーションなどを分かりやすく説明した新たなパンフレットなどを作成し配布していくことも考えております。

一方、団体客ですが、これまでどおりスタッフによる左下のb-2の正門の入り口付近での対応のほか、状況等により新たに、左手になりますけれどもb-1の沼津垣広場においても対応をしていきます。また雨天時には、人数などにもよりますが、資料のaのところですが売店周りの休憩スペース、ひさしの下で対応したり、あるいはb-1の沼津垣広場、あるいはb-2の入り口正面において簡易テントを活用したり、さらには外になりますけれどもcのように直接バスにスタッフが乗り込んで対応するなど、状況に応じた対応を行ってまいります。

資料の右側に移りまして、西附属邸の外観見学ルートになります。川村伯爵の別荘建築と、それから宮廷建築との建築様式の違いなどについて、西附属邸の庭園に説明板を設置することで建築的な見どころなどを分かりやすく案内していきます。

それから西附属邸の玄関、入り口周辺には園内の散策マップの設置を検討します。こちらには園内における各施設の紹介や、その施設までの行き方、それから季節のお花やイベントなどをご案内し、御用邸のさまざまな情報を来園者に伝えていくことで園内の回遊性をより高めてまいりたいと考えております。

以上、西附属邸展示改修計画案の概要について説明をさせていただきました。事務局からは以上となります。

浅羽氏： ありがとうございます。

4 意見交換

浅羽氏： それでは、引き続きまして次第の4に入りたいと思います。ただ今事務局から説明がありましたことについて、各委員の皆さんからのご意見をお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。

金子淳氏： はい。では、いいですか。本題に入る前に事実確認と申しますか、ちょっとした基礎的なことをお聞きします。

まずは2ページのアンケートのところですか。調査方法が「任意の記入」と左側の②に書いてありますが、任意ということは紙を置いておいて、勝手にアンケートを書いて投函してもらうようなそういうかたちですか。

事務局： そうです。

金子淳氏： その場合に、左下の年齢の構成がありますが、非常に経験上意外だったと思うのが、18歳未満が比較的多いということです。日本博物館協会などの統計を見ても一番少ないのは18～29歳とか、美術館はちょっと別にして、いわゆる若者はどの博物館でも博物館全体で見るとすごく少ないですが、かなり来ているなという印象を受けました。

任意でということは、紙を取ってくれやすい人が少し多めに来られるのかなという気がしたんです。つまり子どもはアンケートを書くのが好きなので、実際の来園者の年齢構成にも何かバイアスがかかっているのではないかというのを少し思ったんですが、そのあたりは実際の経験上、あるいはこれまで統計を取っていれば、そういう年齢構成と比べてこの結果というのは違いがある、あるいは同じだなと何か感触はあるんでしょうか。

事務局： 確かに今、先生のおっしゃるとおり、夏休みの期間を含んでいるところは確かにあるのかもしれませんが、若い方に高い傾向が出ています。この今回のアンケートではなくて、これまでに行ったアンケートでは、50代以上が、今回の5割ということではなく、6割か7割ぐらいはいたと思います。

金子淳氏： 分かりました。それからあともう一つは本当に単純な事実確認ですが、説明を聞いていて中身でちょっと思ったのは、4ページのインフォメーションのところですか。拝観券の発行と左側に書いてあって、「拝観券」というと神社のような感じがしますが、これは拝観券として券をこれまでも売ったというような、そういう名称があるんでしょうか。

事務局： ここは特にそういう意味合いはなくて、通常、窓口でチケットを渡す、チケットと申しますか。

金子淳氏： 「拝観券」という言葉は使っていないですか。

事務局： 特に使っているということはないです。

金子淳氏： ここだけ（資料）ということですか。

事務局： そうです。

金子淳氏： はい、分かりました。事実確認については以上です。

金子綾氏： 同じくアンケートですけれども、図2に来園回数と書いてあります。

1回目の人が9割ぐらいということですが、ちょっと注目しなければいけないと思っていたのは4回目以上というところで、たった5%に見えますが、例えば100人中5%の人が、5人の方が4回来てくれると、1回しか来ない人が20名来るよりも私は価値があるのではないかと思っています。

この方々がどんなふうにとか、なぜ4回も来てくれているのかというのを分析することも重要ではないかと思っています。今は1回目の9割の方だけに着目〔していますが〕、新規に来園者を増やすより、1回目だけの人というわけではないですけども、4回目以上の方がなぜ来たかとか、何で4回も選び続けてくれているかというのを知ること、新規の人にもその魅力を伝えやすいのではないかというのを感じます。

あと意外だったのが、SNSとかホームページで15%と書いてあって、今日ちょっと御用邸に行ってきましたが、みんなおじいちゃん、おばあちゃんの世代の方が多かったので、ホームページ、SNSと書かれた人はどんな年代の方なのかというのがすごく気になりました。

あとは、展示とは違う話になってしまいますが、50代から上の方が53%というところで、金子先生が言ったとおり、もしかしたら実態はもうちょっと多いのかもしれないですが、つえを非常についている方が多くて、だから下駄箱につえ立てを用意してあげるといいのではないかというのを、展示とは違う話ですが、今日思いました。下駄箱の所がすごく不便そうでしたので。

浅羽氏： つえの置き場は、今はないんですか。もしつえがあれば、現実がつえを持って歩くのでしょうか。置いておくわけではないでしょうから。

金子綾氏： でも、あそこのビニール袋をお貸ししている所にみんなかけていました。だからそこに掛けていて忘れていって、「忘れてますよ」とみんなで追いかけていたので、それだったらつえ立ての番号札か何かを渡しておいて、忘れない仕組みをつくっていったほうがいいのではないかと思いました。

なので、ここのターゲットになっている中高年というところは、中ではなく、もうちょっと上の方だと思いますけれども、やはりここもターゲットに入れていくのであれば、このへんのユーザービリティとか向上できるというのをすごく感じました。

まだちょっとほかにもありますが、すみません、これぐらいにしておきます。

金子淳氏： では、少しずつ中身についてお聞きしたいことがあります。先ほどの話の流れからターゲットについて、もう少しそのターゲットが実際の展示計画にどう反映されているかというところをお聞きしたいと思います。ターゲットを3ページの右側では5挙げられていて、これは調査の結果というよりは、施設として主体的にどう考えるかということなので、そのターゲットの設定自体はこれでいいと思います。

ただそれが、今度は実際の展示とか映像に、そのターゲットごとにうまく設定できているかどうかという検証が必要になってくると思っています。

例えば一つの例だと、映像を最初に見てもらおうことになっています

が、その映像もターゲットごとに幾つかの番組をつくって選択できるようにするというのも一つの方法かなと思います。

現状では、11 ページのところにあります。2つのコンテンツがあって各3分程度と。ご説明の中ではこの2本のプログラムを交互に見せていくというご説明でしたが、せっかくコンテンツを幾つか用意するとなれば、設定されている5つのターゲットそれぞれに対応する必要はないと思いますが、例えば子どもが来たときには子どもでも分かりやすい番組があるとか、あるいは50代、60代の中高年で、それこそ自然とか花に関心がありそうな人は、そういうのがあるといいとか、それから先ほどのアンケートでも4回以上というハードユーザーの人たちであれば、もう少し突っ込んだ説明が聞きたい場合もあると思います。

ターゲットをせっかく設定したのであれば、そのターゲットにある程度対応したかたちで映像コンテンツを何本かつくって、それに応じた見せ方をしていくのが、考え方としては貫徹していると思います。

それも交互にというよりは、これも同時に別々の団体が来たときにどうするかという運用上の問題があるかもしれませんが、選択できるように、自分が見たいのはこれだというボタンを押すなり何なりで、それに応じた見せ方ができればいいと。

あるいは団体が来たときには、その団体さんの性格に応じて説明する人がその番組を選ぶようにするとか、そういう幾つかの選択肢があって、しかもその選択肢がターゲットに対応しているというのが望ましいのではないかと思います。

あるいは、じっくり見たいのだったら3分では足りない、もうちょっとじっくり見たいという場合もあるでしょうし、急いでいるのだったら2分で終わる、取りあえず全体が分かる2分で分かるようなものもあればいいみたいに、これも時間の長さという意味で選択肢があると、番組をつくるにはお金がもちろんかかるので、そんなに簡単にはいかならないと思いますが、選択肢の幅はある程度用意しておいたほうがいい。それはターゲットとセットで考えていたほうがいいと思います。

そのターゲットとどう対応させるかということと言うと、あと気になったことが2つあります。

1つは、アンケートに表れてきた4回以上というハードユーザーの人に対してどんなふうに対応していくかです。それから、ターゲットの中でも、3ページのターゲットの最後のところに、目的が限定的な来園者で、専門家が来るとか、もっと詳しく突っ込んで知りたいという人が恐らくハードユーザーであるとなれば、詳しく突っ込んで知りたい人向けの例えば調べものコーナーとか、図書でもうちょっと詳しく自分で調べものができるような場所とか、というハードユーザーだったり、あるいは専門家向けの何かスペースみたいなものも必要になってきます。

それには巻物的な文献とか、詳しくはちょっと分かりませんが、あるいはもっと宮廷建築に関する専門的な図書とか置いておくと、そういうターゲットに対してもうまく働きかけができるのではないかと思います。

だから、がっつり知りたい人が少し物足りないなと思うのではなくて、そこにもせっかくターゲットとして設定しているのであれば、ちゃんと調べたい気持ちがある人に対しては、そういう場所も必要なのではないかと思います。

2つあるうちのもう一つが、あとは子どももそうで、かなり子どもについてはちゃんとターゲットとして意識しているというのはよく分かりますし、それから展示も子ども向けの展示を考えましょうということになっていて、これもいいことだと思います。

ターゲットとして子どもを設定したときに、どんな展示の展開ができるかということを見ると、9ページの図面を見ていくと、子どものコーナーが常設展示コーナーの一番上の子ども展示と書いてある所でしょうか。という所に子ども向けの体験コーナーを置きましょうということになっていますが、順番からしたらこれは1番最後になると思います。

だから子どもがもし来て、この常設展示を見たときには、最初は大人向けのよく分からないものをくぐり抜けながら、最後によく遊べるものが、実際に操作できたり楽しめるものが最後に出てくることになると思います。

これは、子どもが実際に何かよく分からない状態に来たときに、常設展示をどう見るかということ想定しながら考えてみると、ちょっと最初の部分は退屈になってしまうのではないかと、大人向けのよく分からないものをずっとくぐり抜けながら最後によくというのは、少しもったいないかなという気がします。

これを考えたときには、5ページのページシナリオを見ると分かりますが、これでもお客さんの動線に沿った順番は子ども展示が1番最後にきています。これもだから最初の部分の小難しい所を子どもも我慢しながら見て、最後によく自分の所だなということになると思います。

もしかすると、これはルートの複数性というか、複線型の展示ルートというか、子どもは子どもの動線があって、小難しいのを我慢しながら見るのではなくて、子どもが直接最初から見られるようなルートが別にあるといいと思います。つまりターゲットに合わせて複数のルート、複線型のルートを設定してみると、子どもが最後によくみたい、そういうことにはならなくて済むと思います。

これもどこかの時点で申し上げたような気もしますが、9ページのこの常設展示の流れを見ていったときに、例えば一番右側の縁側の所に子どもが体験できるような所を、横長というか、この図面で言うと縦長に設けて、大人は細々したほうを見ながら、子どもは右側の体験コーナーみたいな所を、取りあえずお互いに両方またぐみたい、そういう複線型のルートがあったほうがいいかなという気がします。あるいは、できるかどうかはちょっと何とも言えませんが廊下側も活用してそういったことができれば。子どもの展示を一番最後に押し込めるのは、ターゲットとしてせっかく設定をしているのであれば、少しもったいないという気がします。

今のところは以上です。

浅羽氏： 今の2人の貴重な意見は、私もそれを今色濃く感じました。例えば4回以上来ている方というのは本当にありがたい方ですし、金子淳先生のお話の、子どもたちを大人が連れてきたときに、大人の話の聞いた後にやっと子どものコーナーというのは、やはり子どもと来たときは子どものほうを優先的に考えます。

今ちょっとそれと連動しますが、自分が子ども時代のことを考えますと、例えばこの中の建物（西附属邸）には、倉庫の2階屋が1つあります。それから私たちが子どもの時にお寺に行くときに何か下をくぐって中庭に出るような（下向）、そういったところもここにはあります。

いわゆる子ども心にわくわく感を覚えるようなものとか、あるいは水を飲むわけではないでしょうけれども、御膳水を触らせて水まきをやらせるとか、今の先生のお話のように、子どもにも楽しみを複線の中に外のものとうまく取り込んでやると、大人が連れてきたときに大人はある程度分かっているつもりだけれども、子どものほうのわくわく感をさらにやれば、その人たちもまた将来沼津の発展のためになっていくわけだから、それが将来4回以上来てもらえるような人になるかどうかは別にして、そんなようなことを感じます。

いずれ東附属邸のほうとの組み合わせもやっていくと思いますが、今、西附属邸の話として、子どもを非常にこれからも大切にしていく。もちろん50代、60代、どの世代の人たちも大切ですが、子どもが、展示の中で最後のコースのところというよりは、ちょっと早めのコースのところでもわくわく感を覚えるようなものを、外と建物内とセットで柔軟に取り組んだらどうかというのを感じました。

それからアンケートのところですが、人数とか回数とかいうことで、例えばこの11番とか12番は、「当園で一番印象に残った場所はどこですか」「西附属邸で見学された方は、西附属邸で一番印象に残った場所はどこですか」。こういうのは何となしに答えが分かるような分からないような感じだけれども、答えを書いている人はいるんですか。これは全然書いている人がいなかったんでしょうか。

事務局： [答えは] ありまして、今回載せてはいないのですが、参考までに申し上げますと、目的で1番多かったのはやはり「建物の見学をしたい」という方が一番多くて、8割ぐらいでした。あとは「公園・園内の散策のために」とか、あるいは公園内での「イベント」、そのぐらいです。

浅羽氏： イベントですね

事務局： 印象的な施設ですけれども、やはり一番多かったのが「西附属邸」で、こちらが7割ぐらいです。それから「東附属邸」が2割ぐらいです。あとは、「主馬（しゅめ）」とか「沼津垣」です。そういったものが数人いました。

それから西附属邸で印象的な場所ですけれども、一番多かったのがやはり「御座所」です。その次に多かったのが「謁見所」になります。あとは意外にも「調理室」です。3番目が調理室です。それから「御玉突所」です。そういう順番になります。

浅羽氏： 西附属邸は小さい建物ながら、それぞれの部屋固有なものがありま

すから、よくよく見ると味がありますね。私も前からいつも言うように、来るたびに何か感じる、奥があるような感じの味がある建物です。

そういう意味では、年4回も来て相当詳しく知りたいという人、本など購入された方に対して、例えば年3回ぐらいは仮に私が来て、そういう人たちと熱心に勉強会をするぐらいのことを企画されてもどうでしょう。そういう人たちはまた熱心に話を発展してくれる可能性がありますから、建築に関し、ほかの人たちも確実に納得できると思います。

東附属邸のほうは幾分地味だから魅力がないように思いますけれども、よくよく見ると大変な価値がある建物です。西附属邸ほど話題性がないからお客さんが来ていませんが、皇室建築の中で附属邸の建物があるのは、現在は沼津だけです。本邸は日光田母沢、宮ノ下御用邸とか幾つかありますが、附属邸はここだけです。しかも沼津の2つの建物は、できた時からほとんど原形は変わっていません。ということで歴史が完璧に分かる建物ですので、それについてはこの建物は日本で最高級の宮廷建築です。

仮に地方から来た人が相当知識をもって、質問をされても十分に対応できます。その人たちが帰れば、また話を広めてもらえることはあり得ると思いますので、年2回でも企画されればいつでもお邪魔します。

金子淳氏： 大体何回も来る人に対して、どういう手立てができるかというのを考えるのはすごく大事なことだと思います。私は、調べものとか自分で調べるための何か施設が必要ではないかと思いましたが、今お話を聞いて、勉強会とか自主的なサークルとか。

浅羽氏： 本もありますから、私も幾つかの本を出していますから、それらのコピーを持ってくればいいわけですから。そういうのも幾つか置いていると思うんですけども。

金子淳氏： でも学習会とか講座とか、そういうものを開くのも大事だと思います。

それから、あと建築を見てもらうという意味では、もちろん実際に見てもらうのが一番ですが、常設展の中にも模型がかなり重要な位置を占めていると思います。

10 ページのところに、その模型をどうするかということが書いてあります。これを見て少し思ったのが、成り立ちをどう見せるかというのも①の説明のところにあります。成り立ちというか、どんな変遷でどんなふうに増築が進んでいったのかというのもすごく重要な情報だと思います。

この資料の中には、川村邸移築部と増築部の区分と書いてありますが、これがどんなふうに増えてきたのかということを示すところだと思いますが、その変遷をどう見せるのかというのをこの模型の中に、せつかくならもっとより分かりやすいかたちであったほうがいいのではないかと思います。

どういうことかと言うと、うまくできるかどうかさっぱり分からないのですが、もともとはすごく限られたスペースとしても狭い場所が少しずつ増えていったというのが、模型の中で視覚的に見せられるに

はどうしたらいいのかなとちょっと考えました。つまり最初は川村邸だけがあって、ボタンか何かを押すと次に建てられた所が出現するみたいな。下から出てくるとか、あるいはがらっと反転させて逆になると模型が現れるとか。

そうすると視覚的に、もともとはここにしかなかったのが、だんだん増築を重ねてこんなふうが増えていったということが、せっかく模型という視覚を重視するような媒体で見せていくときには、その変遷というか、増えていった様子というか、そういうものもせっかくなら視覚的に見せられるような仕掛けがあると、よりイメージしやすいと思います。いきなり最初からこういう状態だったわけではなくて、増築を重ねて現在の状況になったというのが模型によって分かるとすごくいいのではないかと思います。

ただ技術的にどうできるかは、ちょっとよく分かりません。パタッと反転するぐらいしか今は思い浮かばないですが。そういうふうにボタンを押して操作をして何かが変わっていくと。そうすると結果的に増えていっている様子が立体的に分かる仕掛けがあるといいかと、技術的なこととかは全く関係なく、そんなふうに思いました。

金子綾氏： もう一回ちょっとアンケートのところに戻ると、紹介というのが26%ですけれども、口コミを加速させる仕組みみたいなものをつくったほうがいいのではないかなと思っています。よくあるのは、絵はがきを買ってもらって、それを「ここへ行ったよ」と見せたり、そういうことは口コミをひとつ加速させるような商品だと思います。

今、浅羽先生が話したのを聞いて、これだったら口コミは加速するのではないかと思ったのが、来た人が自分の口で語れるように、写真と浅羽先生の解説付きのちょっとした本みたいなものを買えると、イメージ的には映画館を見にいった帰りにパンフレットを買って帰るみたいなイメージですが、そういうのがあってもいいのかなと少し思います。

でも紹介というか、口コミを加速させるものをなるべく入れて、今すぐには浮かばないのですが、自分の口で語れるようなものも用意できるといいと思いました。そうすると、たぶん紹介は増えていくと思うので。本当にいいところを伝えていけるようなものがあれば、

私も、ここの西附属邸を勉強しながら、自分でこんなにいい所だと思っていなかったのが、浅羽先生の話聞いて初めて何回も行ってみたい、あと会社の人に「この建物って日本で唯一らしいよ」とかそういう話ができるようになったので、やはり口コミできる、本当にこの場所がどういう場所なのかというのを浅羽先生の解説で、浅羽先生一押しみたいなのをどこかに示してもいいと思います。

浅羽氏： 一押しならできます。

金子綾氏： 公認のように。

浅羽氏： 沼津は全て良しなんです。沼津の町全体が全て良しです。日本でも沼津ほどいい所はないです。

金子綾氏： そうですか。

浅羽氏： その中での御用邸でしょう。眺めは最高です。昭和天皇実録によれば、昭和17年に日本で最初の空襲があった時に、貞明皇后は沼津

の御用邸の防空壕に入ったんです。その後、昭和天皇が「東京に帰って」と何回お願いしても離れなかった。

その後、沼津から東京へ帰って、東京で本当の空襲に遭うんですけど。

そういうことで、貞明皇后は昭和天皇から何回お願いされても沼津がいいと。戦争中でも沼津がいいというぐらい、沼津はいいところみたいです。私以上にそういうふうに貞明皇后が思ったぐらい、沼津はいいのではないですか、町全体が。

金子綾氏： ありがとうございます。

浅羽氏： 私は来るたびに沼津が好きになっていくんです。私は磐田市出身ですが。

金子綾氏： 磐田もいい所です。

浅羽氏： 磐田は卓球のほうで伊藤さんとか水谷さんがいますけれども、今度こちらは日本選手権で平野さんというチャンピオンが出ました。平野さんなどにここへ来てもらって、ちょっとNHKなどに歩いてもらったら、またいい話題になると思うんです。平野さんは16歳で高校生で、あの地元の方たちが、先ほども書いてありましたけれども、ちょっと沼津のほうに気分転換で来てもらって、色々いいじゃない。沼津の町も建物も全て良しです。

金子綾氏： ありがとうございます。

浅羽氏： それがまた住んでいると分かっていないけれども、外にいると分かってきます。

金子綾氏： 分かります。私も東京に出て初めて気付きました。私の会社に静浦の人が1人いるんですけれども、静浦の人たちはみんな社会科見学で西附属邸へ行っているらしいです。でも、それ以来行っていないと話していて、もしかしたら浅羽先生ぐらい詳しい人とかが、西附属邸の展示のあり方を外で、沼津市内で出張展示してもいいかと思えます。

浅羽先生が出前講座みたいなものを幾つか開いて、市民がもっと自分たちの口で語れるようにならないと、沼津は結局「何もないよ」とか平気で言えるような、今はもう自分が住んでいて、自分の周りの人でさえ「沼津っていいところある？」と聞くと「何もないよ」と言ってしまうぐらいで、今、浅羽先生が言うように、住みすぎていていいところが分かっていないのが現状です。

特に50代とか60代とかみんな口を揃えて言うのは、「三島は元気だけど、沼津って何もないよ」みたいなことを平気で言ってしまいます。私から見たら沼津はすごく魅力的だし、たぶん自分たちが勉強しないだけなので、もっとみんな学んだほうがいいのではないかと思います。

浅羽氏： 私は、皇室建築を通して今でも秋篠宮様のお手伝いをしていますが、やはり正確なことをお伝えするというので、大げさなことは決して言わなくて、事実だけをお伝えするようなことを心がけています。沼津御用邸も決して大げさなことを言うことはないです。事実はどうだということをやると、その事実がすごく重いです。

例えば、私も信じられないのですが、昭憲皇太后実録によれば、昭憲皇太后が行啓する時に、いつも近くのおばあちゃんが立って

お迎えをしてくれます。107歳というんです。当時107歳といったら、もうきんさん、ぎんさんよりずっとすごいから、そういう人たちの名前が載っていると。

1 つちよっと提案ですけれども、いつも昭和天皇がご幼少の時に来ると、近くの学校の人たちが音楽で、お正月などに歌でお迎えしました。そういうことを考えると、現在皇室の人がいなくても正月か年に1、2回御用邸でお歌の会なども催したりして、そういうようなことも話題性としては、NHKとか近くの新聞社あたりが記事にするような話題を取入れれば、よりいいのではないかと思ったりしています。

やはり最大は、150万も来るといふ近くの港のほうのお客さんに、そのうち何割ぐらいは必然的にこちらもいいなというので来るように、あちらに来るほうの人たちが、必ずパンフレットみたいなものを見るような仕組みにすることも大切ではないでしょうか。あちらのほうに来られる方が、必然的に御用邸に行こうという気分になるようなパンフレットみたいなものは置いてありますか。

事務局： パンフレットは特にないです。

浅羽氏： ないですか。結局、両端なことだから違うかもしれないけれども、いったんこちらに来たら、また違う意味で非常に味わいがあるところだということになってくると思います。

金子綾氏： 前にもお話ししましたが、沼津の港にある水門（びゅうお）の観光客と御用邸の来園者は連動しているんですね。

金子淳氏： 私も旅行に行くときに、あまりちゃんと計画は立てないで行って、またホテルにあるパンフレットとか見て、ここに行こうと決めたりするので、そういうものがないとなかなか行かないと思います。観光地に行くと、そこにいろいろあるパンフレットの中から、これは何だろうと、自分たちがそうやって適当に行ったりすることが多いので、そういうものがあると、連動していくかもしれないと思います。

それからあとは、せっかく価値があるけれども、それをどう伝えるかという話が話題になっていましたが、それが難しいのは、一番効果があるのは外部からの承認があるかどうかです。いかに、うちはすごいよとか、うちの施設は素晴らしいんだということを内側からPRしても、なかなか伝わらないです。

外部からの承認が、マスコミで取り上げてくれるとか、口コミもそうです。よその人が「ここはいいよ」と言ったから、それで説得力があるんです。いくら内部から伝えたとしても、そこまで訴求力はないので、いかに外部から承認されているかということが分かるかどうかというのが大事になってくると思います。

だから世界遺産も、ユネスコが承認したというので、外部からの承認があるから世界遺産になるとあれだけお客さんが増えるので、そんなふう外部からどう評価、取り上げられるかということ考えたときには、口コミもその一つだし、それからマスコミももちろんそうだし、そこにどう働きかけていくかという、そういうルートが設定できるかということだと思います。

口コミにずっとつながるようなルートとしては、金子綾委員がすごくお詳しいし、いろいろなやり方はあると思います。それからマスコ

ミとつながるルートというの、恐らく開拓をしていけば何らかのかたちでできると思います。テレビ番組で取り上げられたら、実は沼津はこんなふうに、こんないいところだったんだということが初めてそこでたぶん内部の人にも分かります。あと新聞で取り上げられるとか雑誌に載るとか。

他力本願みたいなどころはありますが、いかに外部に取り上げられるかというのをかなり意識して、せつかく今回は名勝指定という、これも文化庁という外部から承認されたということであるので、それと併せてタイミングとしてはすごくいいところにあると思いますので、何かルートを開拓してもらえるといいのではないかと思います。

浅羽氏： 現場を担当しているそちらのほうはどうですか。

指定管理者： 2 ページのアンケートですが、若い人というのは、この夏、特にそうだったんですけれども、「ポケモン GO」「ラブライブ！」というアニメの影響があったと思います。なので、ちょっと特殊な事情があったと考えています。

あと先ほど金子委員からあったホームページの紹介のところ、『トリップアドバイザー』のほうのエクセレント承認というのを6月から受けています。そこから若い人がその経由で来ることもあります。

それと facebook の方もしっかりとやるようになったので、これによる効果もあります。

それから、実は自社の女性スタッフにまことしやかに語り継がれている案内というのがありまして、それが浅羽先生から聞いた話と少しずれていました。浅羽先生の話のほうがやはり面白かったです。

というのは、先生のお話は自慢げではないんですね。事実をお話しされていて、それはまたすごく価値があるいいお話をされると、次に私らが案内するときになっても情報を利用させていただいたりしていましたので、先ほどの他者による印象とか承認みたいな部分で、ちょっとこれはアイデアですけれども、ビデオの案内をするときの話の中の1 つに、浅羽先生のビデオをつくってもらえばいいのかなど。浅羽先生の解説が随所に、ここはポイント 1、ポイント 2 というかたちであると面白いと思いました。

あと子どものほうは、小学生は近隣の四小、千本小、香貫小、あと静浦小は2年生と3年生が多いです。先生たちが課外授業として連れてきてくださっていることが多いです。ただ、そこから先はありません。沼津市内は20校ぐらい小学校がありますけれども、来ている学校は多くないと思います。もう少しあればなと思っております。そんなところでしょうか。

金子綾氏： 『トリップアドバイザー』はちゃんと認証とかされていて、すごいですね。ちゃんと全部口コミで。

指定管理者： 飛び込みだったという方が今までにありました。

金子綾氏： すごいと思います。すみません、先ほど沼津の人のことになって、あまりに熱く語り過ぎて、ちょっと思いが入り過ぎてしまいました。

言いたかったのは、市民が自分たちで御用邸といういいところがあるんだというのを言えると、県外から来た人が「この辺いいところはないですか」と言われたときに、「御用邸は素晴らしい建築で、唯一

日本でここしかないんですよ」と一言言えば、みんな行ってくれるのではないかなということ。市民への啓蒙も必要だなということで、西附属邸だけの展示だけではなくて、出張展示みたいなのを各小学校でやったりして、勉強してもらってから西附属邸に行くと、またちょっと価値が上がってくるのではないかと思いました。

それと、あとよくモンドセレクションというのがあります。金子先生が言ったことと同じになるとは思いますけれども、食べ物も、これはモンドセレクションだとか、マツコ・デラックスがおいしいと言ったという、途端に価値が上がります。宮廷建築が日本一と浅羽先生が言う、ここはすごく価値のある場所だという、浅羽セレクション的な感じで、ここは浅羽先生が推しているんだよというのを見学に来る〔ときに〕、こういうパンフレットとかに書いてあると、また価値が変わるかなと思いました。

浅羽氏： そうですね。また市のほうでいろいろ考えてもらって、私はいつでも協力できます。

現在、私は江戸城の建築と歴史という、今の陛下が御在位二十周年記念事業ということで、(財)菊葉文化協会が「皇居東御苑ガイド事業」をつくって10年ほどになりますが、ガイドの人たちを養成する7人ほどの講師がいて、私は建築と歴史の講師をしています。動物の講師とか植物の講師とかいろいろな方がいます。

例えば沼津で、仮に江戸城に関心のある人が市のほうにいれば、ガイドがやるのではなくてガイドの講師の私が説明すれば、また一段と中身が濃い説明ができるから、その企画を沼津のほうでもしてもらったりして、東京と沼津が一体化するぐらいの連携で、たまたま私は両方やっているの、そういうお手伝いもいいかと思います。

金子綾氏： はい、そうですね。

浅羽氏： 皇居東御苑のほうは、結構お客が多いです。外国の方たちも多いです。御苑は無料です。私は、そのうちの江戸城の歴史と建築という、江戸城の話と現在の建物の説明部分を担当しています。

ただ東京へ行って皇居を見て帰ってきたではなくて、よりおいしいところを知る意味で、例えば沼津の人が10人とか15人来るといったら、東京のほうでご案内はできます。

沼津には、沼津城もあったわけですね。沼津の水野家については、水野家の足取りを追うというテーマで見えています。いろいろあります。

金子綾氏： そちらもやっていたらいいですか。

浅羽氏： 沼津に関係したことはみんなやることにしています。沼津のお城はあまり話題になりませんが、沼津城の元が水野家の話になるけれども、江戸屋敷の方に住んでいましたから。

金子綾氏： そうなんですか。

浅羽氏： そういう方もご説明できます。いろいろな話題があったほうがいいのかもしいかなと思います。

金子綾氏： そうですね。

浅羽氏： 江戸城のことも、沼津との絡みはありますからね。

金子綾氏： なるほど。私が行ってもいいですか。

浅羽氏： いいですよ。説明に1名ではもったいないから、4、5人で来ないと

ね。

金子綾氏：　そうですね。はい。

金子淳氏：　ほかとどうつながるかというのは、確かに大事なことだと思います。ちょっと話を先ほどの話に戻すと、ほかの観光地に行ったときに何かパンフレットを探して、そこで見てくるという話をしましたが、こちらのものを置いてもらうということは、相手のパンフレットを置くことになります。

博物館に行ったときにも、ポスターとかをこちらが送って、よその博物館のポスターを貼るのはすごく宣伝効果が高いです。なぜかと言うと関心がある人がみんな行くので、似たような展示があったらかなり訴求力が高いので、すごく効率的にPRができるんです。要するに交換条件でといいますか、貼ってくれるならうちも貼ってあげるよという関係で情報のやりとりをすることが多いです。

ということは、観光地でも例えばほかの別の観光施設に置いてもらおうとすれば、同じようにその観光施設のパンフレットはこちらで置かなければいけないという関係を、どれだけつくっていけるかということになってくると思います。

そうなってくると、今回この展示計画のほうに関連づけると、それをどこかに置かなければいけないですね。うちがPRしてもらいたければ、よそのPRをしないと交換条件が成り立たないので成立しないです。

そうすると、この中のどこかによその観光地のPRをするような場所を設けないとしょうがないし、それからほかの博物館のポスターを貼る場所もどこかに設けないと、よそで貼ってくれないわけです。

そうすると、例えば9ページの図面を見ると、パンフレットを置くとかポスターを貼る場所とか、そういうスペースがどうしても必要になってきます。それが普通の博物館だったら、べつにどこかの壁に適当に貼ればいいのかということになりますが、こういう歴史的建築物の場合にはどこか適当に貼ればいいのかでは済まないで、あらかじめ考えておかねばいけないと思います。

つまりポスターを貼るべき場所というのはあらかじめ設計の中に組み込んでおかないと、適当に壁に貼ればいいのかとはならないです。それをではどこに設ければいいのかということを考えていかないといけないと思います。

現状でも、いろいろなポスターなどが入って正面の廊下の所のどこかに貼ってあったような気がして、この廊下はあまりきれいではないなと思った記憶があります。

そういうのは歴史的建築物とその情報提供とのバランスの中で決めていかなければいけないと思いますが、できればそれを完全にどこかに集中させて、それ以外の所は一切そういう貼りものはしないとすみ分けをしたほうが良いと思います。すみ分けをするためには、どこか集中的にポスターを貼るなり、パンフレットを置くなり、それからアンケートを書いてもらうというような所を、場所はどこかちょっと分からないですが、どこかに置かないといけなくなるのではないかと思います。

ほかの施設とだんだんと交流が増えていくと、余計に増える一方になっていきます。でも増えれば増えるほど、よそでも置いてくれているということになりますので、相乗効果は上がっていくので、たぶん関係を結べば結ぶほど増えていくことになると思います。そうなってくると、もう貼る場所がないとか、適当に画びょうで貼ってしまえばいいみたいになってしまうと、それは建築的な価値を損ねてしまうことになるので、この時点でどこかに集中して、よその場所のインフォメーションをするような所が必要になってくるかなという気がします。

そうなってくると、たぶん動線上だと1番最後になると思います。全部見終わった後で、次にどこに行こうかというときの1つの根拠となるような場所になるということは、出口近くというのがどんな博物館でも大体そういう性質のものを置くスペースを設けています。

そう考えるとある程度限られてきて、6ページになるのでしょうか、このB案でいくとすれば、ずっと見て行って最後に……、ちょっとまだ分からないですね。そのどこかにそういう場所を設けるしかなくなるので、それはあらかじめ計画の中に組み込んでおいたほうが、普通の博物館と違うので、適当にどこかに貼ればいいやでは済まないということをお前提にした上で、計画の中に組み込んでおいたほうがいいのではないかと思います。

もしかするとそれが、今の名称だと受付、アテンダント控室と9ページにあるような場所に。でも、そうすると受付の場所がなくなってしまったりするので、もしかしたらその前の部屋とかどこかに設けなければいけないような気がします。現状でそんなスペースがありそうですか。

事務局： 手前となると、女官応接と警衛内舎人とか、以前A案で常設展示コーナーとして検討した所になると思います。ただ受付の横の部屋を、それだけの広さが必要かどうかは考えなければなりません。

指定管理者： 現時点では、管理事務所内で施設の案内をしています。受付のある料金所の両脇でパンフレットを配布しています。

金子淳氏： それは動線上にありますか。

指定管理者： あります。入ってくると、管理事務所、休憩所、WCとはいつているところがあります。そこの両側で、お金を払っていただく際また、帰日もトイレ等がありますので、その事務所の中で例えばパンフレットを扱うとか。

金子淳氏： 動線上にあるというのは、見終わった人は玄関を出て、もう一度やはり休憩所に行かれますか。トイレに入る人だけが。

指定管理者： そうですね。あとお土産物屋がありますので。

金子淳氏： そちらと連動させるということですか。

指定管理者： そうです。

金子淳氏： なるほど。それはあるかもしれないです。そうですか。いろいろ選択肢ができて、それを整理するといいいのではないかと思います。

浅羽氏： 今までまとめてきた中で、展示の中で乃村さんのほうから提案するような〔ことはありますか〕。今日はいよいよ締め切りの機会の時ですから、このへんは特に展示の仕方でも強調したいというような、いろいろ

意見があったら、プロの意見として。

乃村工藝： 今のお話で、展示スペースとか、あるいは展示の構成の中で、全国の御用邸の情報を発信させようという設定はしてあります。その1つは、たぶん御用邸のことを語るんだったらここに来るというような価値というのは、今日のお話でも多分に言われていたと思います。

ある意味そういうコーナーが、私たちは最初それこそグラフィックパネル1枚というイメージもありましたけれども、もう少し何かやはりアクションを伴うようなパンフレット類と情報発信と、それ以外に何か展開できないかということは言えないんですけども、そういうものも1つあるのかなというのを今日のお話を聞いていて思いました。

ひよっとすると、それは警衛内舎人や女官応接の間を借りる余裕を持っているものなのか、受付の横でやっていけるのかというのはあると思いますけれども、それが1つです。

それと今日のお話で、いろいろ体験のプログラムとか口コミが広がるような仕掛けというのも非常に連動していると思いますけれども、口コミが広がるということは、要はそこにプログラムというか、何か行われていることがあったり、人がいて魅力的な何かが行われているから口コミになりやすい。

というのは、やはりちょっと展示ではなかなか仕掛けをつくりにくいところで、運営サイドのほうにうまく接続できるような仕組みができることを、しつらえとしてどのように利用するかというような役割になっているのかなと思います。

1つの例ですけれども、口コミというのは、例えばよくあるのは小学生の学童が見学の帰りに感想を書きます。見学するようなタイプの施設では割とあります。その書いたものを貼り出して、次に来た人はそれを見て、ああ、こういうのに子どもたちは関心があるのかというのを来館した人同士で何となく思ってもらって印象に残るというのも、1つは観光の中であると思います。

より積極的に観光的な要素が出てくるのであれば、観光の口コミに乗りやすい展示というものが必要になってくるなというので、今日はあまり議論になっていなかったところもあると思いますが、これはちょっとどこまでやれるかというのがありますが、情景再現というのも1つは手ではないかなと思います。そのあたりを、ちょっと逆にどういうふうを考えられているかというのをお聞きしたいところがあります。

11 ページの右の部分です。一応我々としては情景的な再現という中でよく行われる手法の1つではあります。全く演出的に嘘になってしまうのはいかがなものかというのがありますが、今のところ計画の中でこういうものを今切り捨てないで持っておくことも重要かなと思って、今は計画に参考として載せさせていただいています。そのあたりのところはいかがでしょうか。

浅羽氏： 日誌を見ている限りでは、お部屋の中の使う状況というのは読めてこないです。誰が来て何時に出ていったりとかというような人の動きは事細かく時間も書いてありますが、中に出てくるのは、朝7時に部屋の火鉢に火を入れて暖めておいて、7時半に起きてきて火鉢にあたる

と、御幼少時の話ですけどね。

そういうふうに火鉢の話などは頻繁に出てきますが、どこどこのお部屋で何時に御食事をして、どんなものをお食べになったというようなことが、書けないと思います。こういうのは各地でも色々と展示しているところが多いですが、なかなか御用邸の中の生活ぶりというのが分かりづらいです。

それで前にも言いましたが、御用邸に勤務している人たちは、ご来邸されるときは東京から来た人たちにバトンタッチして、帰っていった後、再び建物の維持管理という意味合いなので、現在も管理方法は同じで、ご在邸中のご様子というのはよく分かりません。

ただ近くの学校の生徒たちが来てお歌を歌ってくれたというようなことを聞いていたとか、そういう情景は出てきますけれども、なかなか分かりにくいです。

金子淳氏： 恐らく展示をする側から考えたり、あるいはお客さんの側から考えると、皇室の人がどうかというのものもあるし、それからお付の人たちがどうかというのもあると思いますが、どんなふうに生活していたかというのを具体的にイメージできるような情景再現というものは、あったほうがイメージしやすいと思います。もちろんそれが嘘になってはいけませんが、あとはもう程度問題だと思います。

例えばマネキンを置いて着物を着せてというのが、果たしてそこまで踏み込んだ情景再現にできるかどうか。あるいはもう少し一歩引いた状態で、食事の様子の写真がありますが、どんなものが出たのかというのを実際に再現するとか、家具がどう配置されていたかとか、火鉢だったらどんな火鉢だったのかとか、そういうものを実際に置けるかどうかということです。

浅羽氏： 火鉢も現在、現場には火鉢はなかったと思います。火鉢という表現だけです。ですからちょっと分かりづらいです。

乃村工藝： 先生と一緒に11月に見学させていただいた時に、ひとつ調理場が、今はそこまでですが、若干奥まで入って行って、そこでいろいろ先生に伺いました。今現在もひょっとしたら宮内庁の元料理人なりに取材をかければ、ここでどういうことが想定としてされていたのか分かるかもしれないと確かおっしゃって。

浅羽氏： そうなると、沼津市の方で、宮内庁の総務課というところに、こういうふうな企画をしていて、少し臨場感的にあまり変なことはしたくないので、と事情を言って、相談することもできると思います。そうすると総務課がそれぞれの部局に回すときに、大膳課というところですけど、そちらのほうの誰かを紹介しましょうとか説明していただくとか、OBに聞いてみましようとかいうところまで話がいけばいいですね。

乃村工藝： 恐らく考証の過程が、例えばこういうことを行った上でこうなるんですよということが分かれば、あながち間違っていないにせよ納得はするのかなというのと、先生に話していただいて、それはセキュリティー上そうだからと思いますが、一般に普通に来た人たちからすると、何でこんなに殺風景なんだろうかという感覚はやはり持つと思います。

- 浅羽氏： 特に、調理場の所は調度品が少なくて一番寂しいです。
- 乃村工藝： ないということがなぜか、という展示をするのはなかなか難しいですけれども、何らかの疑問に答えてあげるような状況というのがあると、やはりウエルカムで来ていただいた人に対しての展示という利用者サービスに繋がると思います。
- 浅羽氏： ある時期に沼津市のほうから宮内庁のほうに正式にご相談してもらうことが大切ではないかと思えます。
- 金子綾氏： 体験展示のところですが、建築について体験できないのかと思えます。生活のところは全く分からないというのも良くないのかな、と今思いながら話を聞いていました。子どもの気持ちになったら、建物の体験をするよりも、すごく特別な人たちがやっていたことと同じようなことを体験したほうが思い出に残るのではないかと思えます。体験学習や、体験的な観光といった体験できることについて、すごく需要が増えていますが、その中でも親たちがやらせたいことは教育的なことだったりします。皇室ゆかりの場所に来て建築だけの体験ができるというよりも、やはり皇室としての体験が、生活体験大切ではないかと思いました。
- 金子淳氏： 玉突き体験とかですね。
- 金子綾氏： そうですね。そうかもしれないです。
- 浅羽氏： 玉突きなどは、たぶんルールはあまり変わらないだろうから、玉突きなどはいい。
- 金子綾氏： 変な話、今日、お手洗いがどういうふうに使われていたのか分かりませんが、お手洗いのところはみんな見学者が、え、ここで？ みたいな感じで見ていましたが、生活ではないですけれども。トイレはちょっと難しいですね。
- 浅羽氏： 田母沢でも一応置いてあるだけです。
- 金子綾氏： そうなんですか。
- 浅羽氏： 私などが見ると、おトイレなどはあまり見せなくていいと思いますけど、田母沢でも見せているから。今、田母沢はお風呂場を、沼津と全く一緒に見せています。
- 金子綾氏： すみません。そのお手洗いがどうというよりは、子どもの展示のところ、せっかく体験展示するのだから、生活……、皇室…。
- 浅羽氏： 皇室ということ。子どもの楽しみというのは何でしょう。ここで子どもが楽しむ体験というのは。
- 金子綾氏： 体験展示は、視覚伝達のよりも、体験を絶対にやったほうが良いと思います。
- 浅羽氏： 私は、体験のところといたら、日誌に確実にいつも出てくるのは、朝7時半に起きて、8時半にお二方とかお三方で東附属邸に授業に出かけ何時に帰ってくるというから、ここで例えば夏休み、冬休みでも、子どもたちが朝8時半にスタートして歩いて行って、東附属邸で何か勉強して何時になったら帰ってきますと。それはまさに行動的には体験だと思います。これは事実やっていた記録がありまして、いつも出発する時間と帰ってくる時間で、土曜日になると皇后陛下の本邸に行ったとかいうようなことが記録されているから、東附属邸までリュックサックなどで3、4人で歩いて行って勉強するのは、子ども

としてはいい体験ではないですか。学習体験です。

金子綾氏： 学習体験。そうですね。

浅羽氏： 私などが見ると、自分が子どもだったら、東附属邸で勉強のお部屋があって、お勉強を受けて帰ってきたら楽しいと思います。学習体験は、将来子どもとしては結構印象に残るような気がします。せっかく東附属邸があるから有効に使うほうが。西附属邸から出かけてお勉強したという事実があるわけですから。

金子綾氏： 私のせいで飛躍してしまい、すみません。

金子淳氏： でも今回の改修計画案は、そこまで細かい内容は必要ないですよね。

浅羽氏： そうだと思います。

金子淳氏： 実際に子ども向けの体験展示はやりましょうと。例えばこんな感じだけでも、実際にどういう体験をするのか、展示をつくるかというのは次の段階ですよね。だからその方針が確認できればいいのではないかと思います。

情景再現も、実際にマネキンを置くとか家具をどう配置するかというのは、もちろんこの段階では何も決まらないとは思いますが、情景再現をできる限りやってみようという改修計画案、それを計画の中に入れていくということで合意が得られればいいのではないかと思います。

浅羽氏： それで結構だと思います。

金子綾氏： はい。

浅羽氏： 今日は方向性の確認で、見学動線を反時計回りで回るとか、大きい道筋が出ておけば、それはそれでよろしいのではないですか。それから利用者ニーズ、例えば子ども目線で考えていくとか。

今回は、大きな方向性が固まるかたちの会議ということでよろしいですか。

浅羽氏： では、ちょうどお時間も来ましたので、これで4回目の会議、年度としての一応締めだと思いますが、いろいろ皆さんのほうにお世話になりました。ありがとうございました。

5 閉会

(終了)